

経済援助の原点に帰って —— ●服 部 正 也

(元ルワンダ中央銀行総裁、元世銀副総裁)

途上国援助の強化は債権大国としての当然の責務であるが、この問題に取り組むとき、途上国援助の原点に帰ることが必要である。まず途上国援助は慈善ではない。多数の独立国の間の、物と資金の世界的規模における自由交流という現在の世界経済体制が発展する上で、国と国との間に著しい経済格差があることは好ましくなく、これを是正するための国際連帯の作業である。その経済格差は生産資本の不備により途上国の生産が効率的でないために起ったので、援助の方法は、その生産資本を急速に形成するため、先進国の資金、技術を有利な条件で供与することに求められた。従って、資金、技術の供与は手段であって目的ではない。先進国からの資金援助は国民所得を一時的に増大する効果を持つものの、その国民所得の増大は消費の増加によるもので、生産資本の形成をとまなわなため持続的发展につながらず、あるいは収益性のない生産設備の造成に留まり却って国民の負担となる例も少なくない。援助の目的を達成するためには効率的な生産資本の形成が必要である。効率的とは高価値であり、高価値とは、世界全体で需要の高いことを意味する。一次産品の問題は、世界の急速な技術進展により、需要が減少した産品の生産が続けられたことによる価格の低落であり、途上国が世界経済の変革に対応するのが遅れた結果生じたものである。解決の方法は需要の高い商品への生産転換であり、価格支持は却って問題の解決を遅らせる。一次産品の輸出所得保証は、生産構造の変革までの繋ぎとしてのみ正当化できるものである。高価値の生産品とは儲けの多いもののことで、輸出に限らず、国内、域内で儲けの大きいものでも良い。その選択は国内、域内で決定すべきである。アフリカ開銀十人委員会の国際援助による開発研究基金創設の提言は、この意味で評価される。